

一人も取り残さない授業

40回以上にわたる研究授業の積み上げ

スケジュール帳で確かめました。5月から数えると、40回以上にも及ぶ研究授業を参観させていただいたことがわかりました。私の「学習指導案」ファイルが、だいぶ膨らんできました。お陰様で、それぞれの学級で生徒のいろいろな姿を見ることができました。きらりと光るような一面をたくさん見ることができました。一番研修になったのは、きっと私でしょう。先生方がエネルギーを注いだ授業の数々を振り返り、以下のことを考えました。

(1) コンパクトな導入

授業は最初が肝心です。途中から生徒が意欲的になることはまずないでしょう。導入での授業者の一方的な説明による前時の振り返りは、だいぶ減りました。代わりに、工夫された導入をいくつも見るすることができました。そこからスムーズに学習課題が導き出される授業が増えました。生徒が課題意識をもつことができるかどうかは、授業の成否に関わります。

導入にかける時間が、指導過程に書いてある通りにいく授業は、その後の展開もスムーズです。逆に、予定よりも時間がかかると、たいていの場合は、まとめや振り返りに影響を及ぼしています。時間がオーバーする要因は、生徒はすでに課題解決へと向かいたいのに、授業者がしゃべったり、不要な説明を入れたりすることです。コンパクトな導入が、授業のカギを握っています。

(2) 考えたくなる学習課題

学習課題は、「～しよう」のLet's型と「なぜ～」のなぜ型とでは、明らかな違いがありました。Let's型だと、生徒は活動はしていますが、学習内容に深まりがなく、まとめがあいまいになる傾向がありました。

一方、なぜ型では、一つのことを学習しているため、思考が集中し、促進され、まとめもしやすくなっていました。なぜ型のほうがわかりやすい授業でした。授業は、一つのことをじっくりと深くやるのが理想です。

(3) 学習課題の共書き

授業者が言う課題を聴写する授業が増えました。黒板に書かれた課題を見なくても済む生徒が増えてきました。心配な生徒は、視写するようにし、全員が共書きに取り組むことが重要です。共書きにより、生徒が課題を書き終えるまで待つという無駄な時間がなくなりました。生徒の集中が途切れなくなりました。そのため、課題解決へとスムーズに進めるようになりました。思考が中断しないことは大切なことです。

(4) 自力解決の保障

自力解決の時間が長くなりました。じっくりと生徒に考えさせる授業が増えました。その間に、机間指導が行われています。机間散歩は見なくなりました。よくタイマーをセットする授業者がいます。見ていると、生徒はタイマーを気にしていません。ということは、授業者のためにセットするのでしょうか。5分と言っても、生徒が熱心に取り組んでいるため、1分とか2分とか延長している授業をよく見ます。タイマーのけたたましい音は邪魔ではないのでしょうか。生徒の思考の妨げにはなっていないのでしょうか。

(5) 視点のある振り返り

振り返りでは、何を書かせたいのかがあいまいな感想よりも、わかったこと、疑問に思ったこと、次の学習でやってみたいことなど、視点を明確にして書かせたほうが、生徒にとってもよいし、授業者にとっても得るものが大きいことがわかりました。

今後の課題は、時間の確保です。裏を返せば、振り返りの時間が取れるようであれば、授業者の発問や指示が簡潔で、あれもこれもとならず、一つのことを扱った、わかりやすい授業になっているのではないのでしょうか。

今年度は、一人も取り残さない授業を目指してきました。どの学級の生徒も集中して取り組んでおり、生徒の態度や姿勢からは、取り残してはいない授業が多いように見えます。しかし、学習の理解度やわかったかどうかという点では、どうでしょうか。今後、考えていきたいテーマです。